

じやりみち

…被災地支援情報…

第105号 発行日 2015.7.5
被災地 NGO 協働センター

〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10

TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702

HP:<http://ngo-kyodo.org/>

Facebook:<https://www.facebook.com/KOBE1.17NGO>

E-mail:info@ngo-kyodo.org

口座番号:01180-6-68556(郵便振替)

被災地 NGO 協働センター 2015 年度基本方針

阪神・淡路大震災 21 年目のスタート ～知行合一と百折不撓～

皆様のご協力のもとで阪神・淡路大震災から 20 年間、活動を継続することができました。ありがとうございます。

1 月 24 日～31 日の間に、多様な団体と共に実行委員会を作り「阪神・淡路大震災から 20 年 KOBE 市民と NGO フォーラム」(以下、フォーラム)を開催した。その場では、20 年を振り返りつつ、21 年目のスタートを見据えた宣言文とアクションプラン(以下、宣言とプラン)を作成し発表した。(宣言とプランはじやりみち 104 号参照)

フォーラムでの一つのテーマは次世代への継承であった。これからの社会を担う次世代へどのように阪神・淡路大震災の経験や教訓、考え方を受け継いでいくかという点が重要だった。実際のフォーラムの中では、若い世代からも積極的な意見が飛び出し、阪神・淡路大震災を経験した世代との議論を通して、宣言とプランにも次世代の意見を多く取り入れた。こうした議論のプロセスを通して、20 年間の教訓と経験が次世代にとってより身近なものになり、自分たちの感覚で捉えられるようなものになっていったのではないと思う。宣言とプランは、次世代がそうしたプロセスを経て、20 年間の想いを受け取りつつ、さらに次の世代へと伝えたい想いを自分たちの言葉で表現したものになったのではない。

こうした想いを共有していくためには、やはり議論のプロセスを経験することが大切である。21 年目のスタートを切った KOBE で、20 年間の想いや経験、教訓を次世代が自分たちのものにしていけるような議論の場とそのプロセスを丁寧に紡ぎだしていきたい。

一方で、東日本大震災の被災地に目を向けると、阪神・淡路大震災の教訓が活かされて改善されたこともあるが、活かされていない現実も目の当たりにする。そのことに注目しなければならない。なぜ、阪神・淡路大震災の経験が活かされなかったのかを丁寧に検証する必要があるだろう。

残念ながら、フォーラムの議論の中では個別のテーマについての検証について時間を割くことがほとんど出来なかった。まだまだ積み残された課題が山のようにあり、十分な検証と実践が行われていないのが現実だ。

これから宣言とプランを元に具体的な活動に取り組むに

あたって、阪神・淡路大震災からの 20 年間を一つひとつのテーマごとに丁寧に掘り起こし検証していく作業が必要だろう。こうした検証を丁寧に、かつ身近な問題に引きつけて行うことで、新たな災害が発生した時に同じ過ちを繰り返さないことにつながる。また、こうした課題一つひとつは災害時のみならず日常でも課題とされていることばかりである。例えば、阪神・淡路大震災は今後の高齢化社会の問題を先取りしたと言われた。仮設住宅や復興住宅では孤独死が問題となった。その問題は現在ではより深刻化し複雑化しており、孤独死の問題は震災だけの問題ではなくなった。そうした問題を解決するためにも、震災からの 20 年間の検証を通して、現在の社会の問題を炙り出すことが必要だ。さらに検証のみならず、より良い社会を作り出す動きへのきっかけを作ることが大切である。そのためには、“知行合一”と言われるように、知ることと行為を結びつけ、ただ検証をするだけに留まらず、炙り出された課題に取り組む活動を実践し続けることが必要だ。

フォーラムで発表した 10 のアクションを日々の活動や生活の中で実践していくことは、当たり前のようにとても大変なことだ。そして、阪神・淡路大震災の 20 年を引き継ぎ、さらに次の世代へと伝えていくことは簡単にできることではないだろう。もしかしたら挫折することもあるかもしれない。挫折した時に立ち返る原点として今回の宣言やプランがあるのだと思う。何度くじけても挑戦するという“百折不撓”の気持ちを持って、宣言やプランの行間に込められた想いはなんだったのかという議論を繰り返しながら、そのプロセスを共有し新たな想いも付け加えつつ進んでいくことが、20 年の経験を活かすことにつながる。

21 年目のスタートを切った 2015 年に「いま」を大切にしつつ一つひとつの課題に向き合い地道に実践を続けていきたい。(頼政良太)

※事業報告及び事業計画は P7～10 をご覧ください。

代表交代に伴ってのご挨拶

今年65歳になるのを機に、約20年間務めて来た当NGOの代表を、27歳の若手スタッフ頼政良太（よりまさりょうた）にバトンを渡しました。皆様には、20年の長きにわたってご支援、ご協力を頂き、心からお礼を申し上げたいと思います。これまでご迷惑をおかけしたり、ともすれば不愉快な思いをさせてしまったことも少なくないと思いますが、今日まで支えて頂きほんとうにありがとうございました。心から感謝の意をお伝えしたいと思います。

退任の報に接して、「まだ若いのに何故、交代するのですか？」とよく聞かれますが、実は、65歳で第一線から退くことは、60歳の還暦を迎えたときから決めていました。阪神・淡路大震災から20年という節目の年であることが大きな要因ではありますが、もう一つ理由があります。それは還暦の年にお会いした初対面の中小企業コンサルタントの方に、「おめでとうございます！ところでいつ辞めるのですか？」といわれたことです。大変ショックでした。しかし、その言葉が強く私の背中を押してくれたのです。

実は、すでに2年前にCODE海外災害援助市民センターの方は、事務局長を退任し理事になっています。そのコンサルタントのおかげで、早くバトンタッチができたこととなります。これからは若い人たちのサポートに徹するつもりです。



被災地NGO協働センター
顧問 村井 雅清

さて20年前、阪神大震災地元NGO救援連絡会議・分科会の一つとしてスタートした仮設住宅支援連絡会で代表になり、以後阪神・淡路大震災「仮設」支援NGO連絡会そして現在の被災地NGO協働センターと改変し代表を続けてきました。（1年だけ私の主治医でもある内科医のR医師が担って下さいましたことを触れておかなければなりません。R先生！ありがとうございました。）



ちびくろ救援ぐる一ふ時代の様子

阪神・淡路大震災までは、ボランティア、NGO、災害救援などどれも初めての経験で戸惑うことも多かったのですが、最初に出会った小さなボランティアグループで実に多彩で、ユニークで、かつ人間味のある若者に出会ったことが一番の財産でした。私は、どちらかというと能率・効率を優先し、管理主義的な考え方の持ち主でありましたが、若いボランティアさんたちと文字通り一つ屋根の下で暮らすことで、これまで築いてきた価値観が音を立てて崩れることも体感してきました。そして「現場が大事！」をモットーにしつつも、一方で「市民とNGOの『防災』国際フォーラム」という組織にかかわることで、学者・研究者・宗教者・文化人・ジャーナリストなどというこれまでほとんどおつき合いのなかった分野の方々と議論を重ね、「知」が頭の悪



20年前のミーティングの様子

い私の脳みそを揺さぶり始めたことも体感してきました。

この時に、現場と知の共同作業がなければ社会は変わらないということを強く痛感したのです。現場と知の共同作業によって、初期の頃に若者をはじめとした初心者ボランティアに教えられた「一人ひとりに寄り添い、一人ひとりを大切に！」という災害ボランティアの心構えを、20年間でしっかりと思想あるいは哲学の領域にまで引き上げてくださったのは、やはり被災地の被災者のみなさまであり、また先述した諸専門家のみなさまであり、ご支援し続けて下さったみなさまのおかげだと、心から感謝をしております。

阪神・淡路大震災から20年目の節目に「阪神・淡路大震災から20年 KOBE市民とNGOフォーラム2015」を開催し、高校生や大学生を中心に議論を重ね、「10のアクションプラン」を発表したことは、20年前のフォーラムを振り返ることにもなり、私にとっては意義深いスタートとなりました。

次の代表を担う「頼政良太」が起草した、当NGOの2015年度の基本方針の中に、“知行合一”という言葉を使っているのですが、私が20年間を費やして到達したところに、彼はすでに立っています。当NGOは、これからは新代表のもと、一人ひとりに寄り添い、歩んで参ります。今後ともこうした若者を中心にみなさまとともに「育ちあう」ことに加わって下さい。よろしくお祈りします。

私たちのNGOのボスであった草地賢一牧師は、「生きることは分かち合うこと」といわれました。私は加え

て「生きることは育ち合うこと」と言わせて頂きます。また私がいつも悩み、行き詰ったときに快く相談に乗ってくれた曹洞宗の僧侶有馬実成師は、当NGOの機関紙『じゃりみち』という名を評して、「NGOというのは、きちんと舗装された道を歩くのではなく、じゃりみちのように自分の足でしっかりと大地を確かめながら歩くというものなので、いい名前だね！」と褒めて下さいました。

そして20年前から共に歩いて来た大賀重太郎さんと黒田裕子さんという二人の盟友を亡くしましたが、大賀は「育ちあう」ことの大切さを説き、黒田は病床で最後の最後まで振り絞るように「生きること」の大切さを見事に実践されました。

こうして先人たちが遺した「智」というものが、次世代を担う若者たちにも受け継がれていくことを願っていますが、やはりNGOの進む道はじゃりみちであろうと思います。

でも決してこのじゃりみちを歩きやすい舗装道路にするのではなく、歩き難いが足の裏でしっかりと大地を踏みしめながら歩くことにチャレンジして頂きたいと願っています。

でも、中には歩調を合わせてみんなと一緒に歩くことができない者もいるでしょう。そんな時には、決して置き去りにするのではなく、みんなで知恵を出し合って、じゃりみちを歩き続けましょう。

最後の一人に寄り添って……。ありがとうございました。



20年前のボランティアたちと

20
th

阪神・淡路大震災から20年

KOBE 市民と NGO フォーラム 2015 アクションプランのその後

2015年で丸20年を迎えた阪神・淡路大震災。その経験や教訓をどのように次世代に伝えるのかを考えるフォーラムを2015年1月24日に開催いたしました。

その場でも出された意見を踏まえて、1週間の議論を行い、1月31日には宣言文と10のアクションプランを発表しました。(じゃりみち104号またはHPを参照)

今年度の基本方針の中で、何度か触れておりますが、このアクションプランをいかに具現化していくかが21年目の新たなスタートを切ったKOBEにとって、とても重要なことだと思っています。様々な実践の方法がありますが、私たちはその一つとして寺子屋事業を位置づけています。

今年度の寺子屋事業は、必ずサブタイトルにアクションプランの文言をつけています。5月の寺子屋は「5年目の福島と向き合い、水俣から学ぶ～考えてつながろう、自然ともつながろう～」です。1月のフォーラムを通じてやはり災害や震災の問題は日常の問題と密接に繋がっているということに気がつき、全ての問題は根本で繋がっているということにも気がつきました。つまり、様々な社会課題を解決するにも、最終的にはこのアクションプランに書かれていることを実践することが、解決策に結びつく一つの方法であるということです。

寺子屋の前のお昼にはフォーラムに参加してくださった高校生の発案で福島の高校生を神戸に招き、水俣からお招きした講師の谷さんと共に勉強するという機会もありました。こうした勉強会を通して、自分たちにできる具体的なアクションは何であるのかを考えていきたいと思っています。また、思いついたアクションを実現できる場をなるべく提供できるようにしていきたいとも考えています。

少しずつではありますが、アクションプランの実現に向かう動きが生まれつつあるのではないかと思います。フォーラムを開催する際に、若い世代にとって身近な問題に引きつけて考えないと自分ごとにならない、という意見も出ました。このアクションプランの具現化はまさに身近なところでコツコツと積み重ねていくことが大切です。少しずつ一人ひとりができることを重ねていくことが、いずれは社会を変える大きなうねりになるのではないかと考えています。

21年目のKOBEから踏み出す一歩は、小さくても確実に前に進む、そんな一歩にしていけるように、小さな実践を積み重ねていきたいと思っています。(頼政良太)

被災地 NGO 協働センター 新運営委員就任のご挨拶

この度、ご縁あって運営委員を務めさせていただくことになりました。未熟者で恐縮しておりますが、委員の年齢層の多様化を図られるとのことでお話をいただき、感謝しています。

私が被災地 NGO 協働センターと初めて出会ったのは、2002年の学生時代でした。当時はボランティアとして関わり、その後2010年から5年間、協働センターと繋がり深いCODE 海外災害援助市民センターに勤務していたこともあり、よく協力して活動させていただきました。特に、東日本大震災の後の「野菜サポーター」や「まけないぞう」事業では、農家さんやタオルの作り手さん・買い手さんをはじめ多くの支援者・被災者の方々の間に広がる、人が人を想う気持ちに希望を見ました。外国の被災地の友人たちからの支援は、環境は違えど互いの痛みを共有し想像することで互いをもっと大切にできると示してくれました。災害はつらいことですが、支えあおうとする人と人の姿は、平和という言葉を描いたらこうなんじゃないかとさえ思わせてくれました。

協働センターは、人間を「一人ひとり」と見て個を尊重することを大切にしています。そして「困ったときはお互い様」。私は4月から、作業療法士としてリハビリの仕

事をしていますが、目の前の人の人生を考える際に大事なものは、「一人ひとり」の主体的な生き方、そしてその人が他の人とつながってこそ現れてくる生きがい——「お互い様」、まさに協働センターやCODEで学ばせていただいたことそのものだなあと感じます。

災害救援をはじめとする協働センターの種々の活動はもちろん、そのメッセージの発信者としての存在意義を今後も応援しています。

岡本千明

たつの市 女性が担う地域防災塾の取り組み

二〇一三年九月にたつの市に誕生した「女性が担う地域防災塾」の活動に定期的に関わらせていただいています。この女性が担う地域防災塾は、地域の防災・減災を女性も担ってほしいという想いから設立されました。経緯については、下段のコラムを参照してください。

東日本大震災の被災地を見回してみても、避難所の運営などに女性が関わっているケースは多くはありませんでした。災害直後の避難所内では、女性用の更衣スペースもないような場所も数多くあり、女性たちの困りごとは放置されたままであるような場合もありました。

たつの市は南海トラフ巨大地震が発生した場合、津波による被害も想定されています。そうした被災地になりうる可能性がある地域であり、高齢者も多く、防災・減災を行うためには女性の力も必要不可欠であることは明確です。もしも平日の昼間に災害が起きた場合には、地域に残っている方の割合は女性の方が高く、そうした方々に防災・減災の力をつけてもらおうというところから始まりました。

これまでの取組の中では、災害時の対応を考えるクロスロードゲームや、地図上で避難行動を確認する災害時図上訓練などを行ってきました。

図上訓練は、まず女性が担う地域防災塾の方々だけ



図上訓練の様子

で練習をし、その後、塾生の皆さんが講師となって地域の方々に向けて発信をしています。

最近では、たつの市社会福祉協議会さんの主催する防災講座などでも、女性が担う地域防災塾の皆さんが活躍しています。

例えば、三月に行われた災害時図上訓練では、各地区のテーブルにそれぞれ入っていただき、進行役を引き受けてくださいました。

クロスロードゲームも、サポート役としてお手伝いをいただき、早速別の地域でも行いたいというような声も出ているようです。

こうした地道に地元で取り組んでいく活動が地域の減災のためには必要なのだと感じます。特に防災・減災に女性の視点を取り入れていくことは、まだまだ課題になっている部分だと思えます。この女性塾の活動がきっかけとなり、もっともっと多様な主体が取り組むことができる防災・減災活動を目指していきたいと思えます。

頼政 良太



講師を招いての勉強会

女性たちが地域防災を担う

たつの市での取組み

たつの女性が担う地域防災塾 岡本芳子

東日本大震災の後、ある会合で聴講した内容は二十年前と何ら変わっていないとの印象を受けた。

避難所運営は男性中心。女性の権利、ニーズが見逃され被災地において会議、集会に女性が名を連ねることが少ないとの指摘がなされた。

人口の半分を占める女性の声が届かない、届けられない仕組みはどこがおかしい、見落とされたままではないはずがない。

女性や社会的弱者への配慮には女性の視点が必要不可欠の思いに至ったのが切っ掛けとなり二〇一三年九月に「たつの女性が担う地域防災塾」を結成した。

一年十ヶ月経過、その間恵まれた指導者と講師を得、塾生は災害を意識し、減災に向けて真剣に取り組み始めている。

特に日本の防災に女性が関わることが重要との見知から「女性たちが担う地域防災」について、なぜ女性なのかの本質を掘り下げ、検証しつつ学びを深めている。

災害時になってから、女性、子どもの視点と聞いたことを言い始めても遅い。日頃の防災体制がしっかりと出来ていれば、自然に女性、乳幼児、子ども、高齢者、障がい者に優しい避難所となる。防災体制、やさしい避難所をつくっていくプロセスを学び、「共助」の役割を担える人材を育てたい。

被災地 NGO 協働センター新代表お披露目会

今年1月17日、阪神・淡路大震災から20年を迎え、あらたな一歩を踏み出しました。

この20年間、みなさまには多大なご支援、ご協力を賜り、心からお礼を申し上げます。ありがとうございます。この度、20年にわたって代表を担ってこられました村井雅清が退任し、頼政良太が新代表として着任致します。これまでと同様に新代表のもと活動に取り組みますので、今後ともご支援、ご協力のほどよろしくお願い致します。

この20年間、国内外において災害は後を絶ちません。災害のたびに、人の無力さを思い知らされるばかりです。一方で「人を救うのは、人だ!」という阪神・淡路大震災からの学びは、変わることはありません。

残念ながら阪神・淡路大震災及びその後の災害での教訓が相次いで発生する災害には生かされているよう思えません。そういう意味では、この20年をしっかりと検証し、私たち一人ひとりにとって身近な暮らしの中で振り返る必要があるのではないかと痛感しています。

20年目には、今後に向けてのアクション・プランを発表し、その一つひとつを具現化するための取り組みがスタートしました。「知行合一」「百折不撓」をモットーに邁進していく所存でございます。

つきましては、下記の要領で新代表のご挨拶とお披露目の会を開きたいと思っております。このような催事において参加費を頂戴するのは、誠に失礼かと思っておりますが、どうかご理

解下さい。なお、当日は懇親会（会費制）も予定しておりますので、ご参加いただける方は、一週間前までにご連絡頂けたら幸いです。

みなさまお忙しいとは存じますが、万障お繰り合わせのうえご参加下さいますようによろしくお願い申し上げます。

【日時】2015年7月18日（土） PM2:00～PM5:00

【場所】こうべまちづくり会館

(<http://www.kobe-machisen.jp/access/>)

神戸市中央区元町通4-2-14 TEL078-361-4523

【参加協力費】一般1000円、学生500円（資料・お茶菓子代として）

【定員】80名（要申込み）

【協力】こうべまちづくり会館

【主催】被災地 NGO 協働センター

【問い合わせ先】被災地 NGO 協働センター

TEL078-574-0701 FAX078-574-0702

E-mail: info@ngo-kyodo.org

■事務局ボランティアも募集しています！

私たちと一緒に活動して下さるボランティアさんを随時募集しています！

初心者の方も全く問題ありません。ボランティアでの活動を通して、NGOや市民社会、防災・減災のことも学ぶことが出来ます。やる気のある方大歓迎です。ぜひお越しください。

■編集後記

皆さん、こんにちは。編集を担当している頼政です。神戸はかなり蒸し暑くなり、初夏の色合いが濃くなってきましたが、皆さんはいかがでしょう？

毎年この時期になると悩まされるのが、蚊の大量発生です。当センターは立派な中庭があるのですが、そのぶん、蚊にとってもかなり居心地の良い住処となっています。

いつも大量の蚊取り線香で対処しているのですが、なかなか苦戦しています。

そんな当センターの立派な庭をぜひ一度見に来てみませんか？多くの方が気に入ってくださっています。

・・・ついでに蚊を退治するために手入れも手伝ってもらえると嬉しいです（笑）



当センターの姉妹団体「CODE 海外災害援助市民センター」の活動にもご協力よろしくお願ひします。

今年4月に発生したネパール地震の支援活動を開始しています。皆様ご協力よろしくお願ひします。

詳しくはHP等をご覧ください。

HP:<http://code-jp.org/>

■入会・カンパのお願い

被災地 NGO 協働センターでは、会員を随時募集しています。普段なかなか活動にご参加できない方でも賛助会員等で活動に間接的にご参加いただくことが出来ます。ぜひよろしくお願ひします！

活動カンパ、事務局カンパも随時受け付けています。

下記の振込先によろしくお願ひ致します。

- ★団体会員 年会費 ¥ 10,000 × 1口以上
- ★個人会員 年会費 ¥ 3,000 × 1口以上
- ☆団体賛助会員 年会費 ¥ 10,000 × 1口以上
- ☆個人賛助会員 年会費 ¥ 3,000 × 1口以上
- ☆自由選択会員 年会費 ¥ 任意の額

郵便振替 加入者名：被災地 NGO 協働センター

口座番号：01180-6-68556

被災地 NGO 協働センター 2014 年度事業報告

1. 寺子屋事業

2014 年度は「阪神・淡路大震災から 20 年 KOBE 市民と NGO フォーラム」(以下、フォーラム)と連動した寺子屋を開催する予定であったが、水害の頻発等により十分な計画を立てることができず開催はできなかった。フォーラムの準備会において、寺子屋同様の内容を勉強する機会があった。

2. まけないぞう事業

岩手県中心に「まけないぞう」事業を展開。現在の作り手の人数は 55 人となった。

4 年の節目を迎えた被災地では、仮設から復興住宅、仮設の統廃合などによるコミュニティの崩壊している。そのコミュニティの再構築を図るためのボランティア、NPO/NGO などの団体も補助金などの打ち切りにより、激減したり、縮小を余儀なくされている。復興住宅では、すでに孤独死や自殺が発生したり、環境の変化に伴い、体調悪化を招いている人も少なくない。発災後から協力団体として活動している遠野の「ふきのとうの会」の女性チームは手芸を通して、生きがいやコミュニティ支援のために沿岸被災地に継続的に通っている。同時にタオルや材料の仕分けも手伝ってくれている。また、釜石市にある不動寺では、タオルを全国から募集し、タオルの仕分けを行い、各寺院や宗教を超えたつながりなどを生かし約 2,000 頭の販促などを行ってくれた。

まけないぞうを通して、心のケアにつながっている。支援者からのメッセージを以下に紹介する。

みなさま、お元気で過ごしてはいかがでしょうか?このタオルは、福山市立湯田小学校 6 年生(現在中学校 1 年生)からいただいたものです。毎年、湯田小学校の卒業生に「まけないぞう」を送らせて頂き、ネーミングがよいとか、かわいらしいとか言って好評です。「まけないぞう」をもらうまで、震災に遭った人たちがいまだに続けて作ってこれがいきがいになっていると知らなかったという人がほとんどです。少しずつでも皆さんに知ってもらったらいいと思います。このタオルを使ってかわいらしいぞうさんを作ってください、元気にお過ごしください。少しずつ広められたらいいですね。いつもありがとうございます。(福山市)

一方、作り手である被災者の方は、「あつという間に 4 年になりました。まけないぞうとともに 4 歳も年をとりました。これからもぞうさんと一緒に過ごしたいと思えます。」「月日の流れの早いこと、あの日あの時より 4 年目となり、でも私の心の中には、いつも海、波に流れたことは、昨日のように思い出し、恐ろしいことです。ただ、ぞうさんの顔づくりがいちばん大変、同じ形にできないこと、夢中で作ります。私のぞうさんどこへ行くのかと元気でいてね。会えることを楽しみにしています。」「4 年目を前に隣町に引っ越しました。それでも仮設の集会所に集まってぞうさんを作るのが楽しみです。自分達が助けられたように、誰かの心を癒してくれる可愛いぞうさんをもう少し続けたいです。」と話してくれている。まさに「まけないぞう」が被災者にとって、心のケアの一環となっていることが伺える。

◇実績: 10,103 頭出荷(うち子ぞう・親子ぞう・リングぞう、カップルぞうは 3,012 頭)

◇作り方講習(岩手県は省く)
7/14 北米研修(3.2)を参照)

◇回収、作り方講習会(岩手県遠野市、大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市など)
6/25 ~ 7/9、6/9 ~ 6/23、7/22 ~ 7/30、9/5 ~ 9/22、11/12 ~ 12/1、2/25 ~ 3/19

◇イベント等での販売
5/3 ~ 4 高槻ジャズストリート 2014
5/4 ~ 5 アースデイ KOBE 2014
6/1 灘チャレンジ(神戸)
7/24 ~ 7/29 第 3 回川徳 絆フェア

10/11 ~ 12 美味しい!たかつき。食の文化祭 たかつきジャズとグルメフェア 2014

3. 災害救援事業

1) 国内災害に関する救援・復興・提言活動

(A) 災害発生時の対応

2014 年度は災害が多発し、多くの災害ボランティアセンターが開設された。当センターでは、スタッフの頼政を震災がつなぐ全国ネットワークのメンバーとして、他団体と連携しながら被災地へ派遣した。また、その他のメンバーも災害ボランティアとして、現地での活動を行った。

広島土砂災害では、真言宗の方々にも多大なるご協力をいただき、お寺を拠点として活動を展開した。

◇徳島県海陽町水害派遣

8/5 ~ 8 (頼政)

◇徳島県那賀町水害派遣

8/18 (頼政)

◇兵庫県丹波市水害派遣

8/24 ~ 28 (頼政)

10/12 (村井)

10/18、10/26、11/8、11/24 (炭焼き)

◇広島市土砂災害派遣

8/26 ~ 9/1、10/1 ~ 10/8、10/18 ~ 11/2 (増島)

8/30 ~ 9/10、14 ~ 19、22 ~ 27、30 ~ 10/8、22 ~ 26、29 ~ 31、11/5 ~ 7、12 ~ 14、17 ~ 19、22 ~ 24、26 ~ 28、12/5 ~ 13、18 ~ 19、2/16 ~ 19、3/25 ~ 27 (頼政)

(B) 東日本大震災支援の継続

まけないぞう事業は引き続き、神戸からのサポート体制を継続した。また、東京大学被災地支援ネットワークとの連携は引き続き継続し、足湯ボランティアのつぶやきから「こころの健康ガイドブック」の作成を震災がつなぐ全国ネットワークの一員として共同で行ってきた。

※まけないぞうの記録はまけないぞう事業の項、足湯ボランティアのつぶやきガイドブックについては提言・ネットワーク事業の項を参照

(C) 復興支援活動

◇まけないぞう事業

2. を参照

◇KOBE 足湯隊のサポート

当センターが事務局を務める「KOBE 足湯隊」は、主に能登半島(2007 年地震発生)・兵庫県佐用町(2009 年水害発生)など地震や水害の被災地に出かけてきた。能登半島地震の被災地では、毎年継続的に熊甲祭りに参加。また、今年度は仮設住宅に住んでいた方々の同窓会を企画・開催した。

同足湯ボランティアは、2010 年から神戸学院大学を初めとする「ボーアイ 4 大学連携事業」として、佐用町へ 15 人程度の大学生(神戸大学、神戸女子短期大学、神戸学院大学)が年に 2 回入った。

東日本大震災では、神戸大学東北ボランティアバスのメンバーが被災地での足湯ボランティアを継続して行っている

・ミーティング: 4/13、4/22、6/18、7/31、8/27、10/21、11/24、12/15、1/20

・その他

4/13 足湯ボランティア講習会

6/27 神戸学院大学足湯ボランティア講習会

6/29 神戸学院大学足湯(佐用町)

7/3 神戸学院大学足湯ボランティア振り返り

9/6 足湯講習会(たつの市)

9/18 ~ 21 お熊甲祭り(能登)

11/1 ~ 3 能登仮設同窓会

1/25 イザ!美カエル大キャラバン

(D) 南海トラフ巨大地震に対して

◇女性が担う地域防災塾との協力

2013 年度に引き続き、女性が担う地域防災塾(たつの市)の活動へ参加。同塾生の足湯ボランティア講習会やたつの市内でのまちあるきや災害時図上訓練、クロスロードゲー

- ムの講師を務めた。
- 6/6 室津まちあるき
- 8/13 提言づくり
- 9/6 足湯講習会
- 10/4 地区防災計画についての講演（京大矢守先生）
- 1/19 クロスロード打ち合わせ
- 2/1 たつの市社会福祉協議会主催：防災クロスロード
- 2/22 図上訓練予行演習
- 3/14 たつの市社会福祉協議会主催：災害時図上訓練

◇お寺防災の継続

アユス関西が解散となり、積極的な動きは作ることができなかった。

◇高知県黒潮町などとのつながりの継続

高知県黒潮町には訪問することができなかったが、たつの市での企画などで黒潮町の取り組みを紹介。また、8月の水害緊急支援で徳島県海陽町など徳島県関係者とのつながりをつくることができた。

※(A) 災害発生時の対応参照

2) 海外災害に対する緊急救援活動とその後の復興へつなげる支援活動

当センターは CODE 海外災害援助市民センターの事務局をサポートしながら、震災の経験を伝え、痛みの共感をし、お互いに学び合い、海外の災害救援を通して、支えあいの輪を広げてきた。2014 年度も東日本大震災への支援活動などで多大なご協力をいただいた。また、CODE 海外災害援助市民センターが協力し、NPO 法人ワールドユースジャパンが主催した『「復興、エネルギー、持続可能な生き方」をテーマにした1ヶ月間の教育プログラム』の神戸パートにおいて、阪神・淡路大震災についての講義およびまちあるき、東日本大震災についての講義を行った。

- 7/14 まけないぞう講習会
- 7/17 阪神・淡路大震災について講義及びまちあるき
- 7/18 東日本大震災について講義

4. 提言・ネットワーク事業

(A) 「阪神・淡路大震災から20年 KOBE 市民と NGO フォーラム 2015」の開催

関係団体（実行委員：神戸大学学生ボランティア支援室、被災地 NGO 協働センター、特定非営利活動法人阪神高齢者・障害者支援ネットワーク、一般社団法人 ひょうご部落解放・人権研究所、部落解放同盟兵庫県連合会、公益財団法人神戸 YWCA、（特）神戸定住外国人支援センター（KFC）、（特）CIL 神戸 Be すけっと、（特）拓人こうべ、公益財団法人神戸学生青年センター共催：こうべまちづくり会館）と実行委員会を結成し、準備を進め2015年1月24日～31日に開催した。若い世代にどのように阪神・淡路大震災の経験や教訓、想いを伝えるのか？ということが大きなテーマとなった。24日には3部構成のフォーラムを開き、若い世代が議論し、さらにその内容を大人世代がどう受け止めるかの議論、最後には同じフロアで対等な意見交換をする場を作った。その後の1週間フォーラムで出した意見をまとめ、宣言文とアクションプランを作成するに至り、31日には発表会を行った。※宣言文とアクションプランはじゃりみち104号を参照

◇準備会ミーティング（5/9、6/26、7/23、9/11、9/29、10/9、11/9、12/12、12/14、1/7）

◇その他

- 5/22 松本誠さんとの打ち合わせ
- 8/1 河村宗次郎さん（兵庫県被災者連絡会）インタビュー
- 8/7 長田・灯籠流しでのまちかどインタビュー
- 8/11、12 元町でのまちかどインタビュー
- 8/18 福永年久さん（拓人こうべ）インタビュー
- 8/19 正井礼子さん（ウイメンズネット・こうべ）インタビュー
- 8/23・24 フォーラム合宿・松本誠さん講演会「阪神・淡路大震災20年を振り返って」
- 1/24 フォーラム
- 1/25～30 宣言文作り
- 1/31 宣言文発表会
- (B) 足湯ボランティアからの提言

東京大学被災地支援ネットワークと連携し、震災がつなぐ全国ネットワークの一員として足湯のつぶやき分析から生まれた「こころの健康ガイドブック」作成（助成：日本財団）に取り組んだ。当初予定は、3月末発行であったが、夏の水害頻発等の理由で5月末完成に延長された。こちらのガイドブックの内容には足湯ボランティアからの提言が盛り込まれている。

また、同ネットワークと連携し取り組んでいた足湯ボランティアに関する書籍発行も当初予定から延期され6月発行の予定。

(C) まけないぞうからの提言

足湯ボランティアと同じく東京大学被災地支援ネットワークと連携し、同ネットワーク開催の「復興グッズ被災地支援グッズ主宰者連携会議」に定期的に参加。同ネットワークが掲げる「災害時ボランティア経済圏」の論の確立に関わってきた。

(D) その他

2014年度で第10回目となる東海地震に備えた「静岡県内外の災害ボランティアによる救援活動のための図上訓練」でのネットワークには引き続き関わっている。県外メンバーとしてプログラム作成のためのワーキンググループ（WG）にもスタッフの頼政が参加した。

- ◇WG ミーティング（7/23、11/4、12/17、2/13、3/6）
- ◇図上訓練（3/7～8）

<関係団体・グループとのネットワーク>

- ・しみん基金 KOBE/ 副理事長
- ・震災がつなぐ全国ネットワーク / 団体会員・事業担当責任者
- ・人と防災未来センター / 事業評価委員
- ・日朝兵庫友好の会 / 常任委員
- ・レスキューストックヤード / 評議員
 - ・CODE 海外災害援助市民センター / 理事
 - ・日本災害復興学会 / 理事
 - ・内閣府防災ボランティア活動検討会 / メンバー
 - ・関西学院大学災害復興制度研究所 / 外部研究員
 - ・東海地震に備えた災害ボランティアネットワーク委員会

会

- ・9条の会ひょうご
- ・KOBE ビース i ネット
- (その他)

神戸大学非常勤講師 / 神戸学院大学非常勤講師 / 福井大学非常勤講師 / 神戸松陰女子学院大学非常勤講師 / 日本防災士機構 / 講師

4. 広報事業

会員間の連携と協働の充実を図るとともに、被災地内外の関係団体、支援者への情報発信を行った。リーフレットを刷新。

- (A) じゃりみち 4回発行（各約800部）
- (B) HPは新たなデザインへと刷新し、情報発信を行っている。
- (C) FBなどのSNSも利用しながら情報発信を行っている。
- (D) メールニュースの配信
 - これまで通りメールニュースを配信する。
 - ・ハンストニュース
 - ・まけないぞうがつなぐ遠野物語
 - ・その他関連ニュース

5. その他

(A) 脱原発24時間リレーハンガーストライキ

2012年度から継続して脱原発ハンガーストライキを「原発が停止するまでやり遂げる覚悟」持って今日まで続けてきた。また、ハンストに参加して下さっている方同士の交流の場を設けた。

5/28 ハンスト同窓会

(B) 兵庫県からの受賞

- ・兵庫県功労者賞
- ・阪神・淡路大震災20年感謝状受賞

被災地 NGO 協働センター 2014 年度事業計画

■事業概要

1. 寺子屋事業

今年度の寺子屋事業は「阪神・淡路大震災から20年 KOBE 市民と NGO フォーラム 2015」で作成した宣言文とアクションプランを具現化するとともに、阪神・淡路大震災からの20年間と東日本大震災、さらにはその課題につながるテーマについて振り返り、震災20年の課題の掘り起こしを行っていく。フォーラム関係者とも連携し、次世代の意見も取り入れながら、さまざまな世代が交流できるようなプログラムやワークショップを行いたい。

2. まけないぞう事業

報告書にも記したように、不動寺(岩手県釜石市)をはじめとする寺院関係、生活クラブ生協、「復興グッズ被災地グッズ主宰者連携会議『コレカラ』」などと連携しながら、広報や販売などを行う。5年目を迎えた被災地では、コミュニティが崩壊し孤独死や自殺などが出ているような深刻な状況で、コミュニティの再構築が急がれる。被災者自身がお互いに支えあえるような関係性づくりを行う。東北でのまけないぞう事業は今年度も継続する。阪神・淡路大震災より問題が深刻化する中、まけないぞうが「生きがい」となっている作り手さんも多く、販売にも力を入れながら、被災地の情報を発信していく。また、当 NGO と連携している「ワカツク」東北支援プロジェクトでは、上位ランクにあげられている。

3. 災害救援事業

災害時には迅速に対応できるよう、昨年の豪雨水害や5年目の東日本大震災の課題などを振り返り、検証を通して見直し、地元の人たちと連携し、被災者の声なき声に耳を傾けながら最後の一人までをモットーに支援活動していく。昨年に引き続き、将来予想される大災害(南海トラフ巨大地震など)を念頭に置き、事前に顔の見える関係づくりを進めていくとともに、阪神・淡路大震災や東日本大震災の経験を災害が発生した地域の特性に合わせて活用しながら活動を行う。また、海外での災害発生時には CODE 海外災害援助市民センターの事務局をサポートする。

4. 提言(アドボカシー)・ネットワーク事業

今年度は寺子屋事業を柱にしつつ「阪神・淡路大震災から20年 KOBE 市民と NGO フォーラム」の宣言文及びアクションプランの具現化を持って提言とする。また、昨年度から引き続き足湯ボランティアの活動及びまけないぞう事業から見える課題について提言を行う。

5. 広報事業

昨年同様、機関紙や HP, FB 等で広報活動を行っていく。

6. その他

- (A) 脱原発 24 時間リレーハンストを継続する。
- (B) ユネスコへの伝統木造技術文化遺産登録運動に参加。
- (C) 基本方針に合致すると思われることにおいても可能な限り取り組む。

■事業内容

1. 寺子屋事業

※今年度はワークショップ形式も行う

(A) アクションプランの具体化・実践のための学び 年3回程度の予定。

- 第1回：障がい者について学ぼう(予定)
～気軽にボランティアをしてみよう～
井奥裕之(Be すけっと)・風裕之(予定)
- 第2回：舞子高校の取り組みについて学ぼう(予定)
～まずは一歩を踏み出して小さな実践を重ねよう～
舞子高校環境防災科の生徒(予定)
- 第3回：灘高校の取り組みについて学ぼう(予定)
～時にはアホになってみよう～
佐野海士(灘高校3年)(予定)

(B) 阪神・淡路大震災及び東日本大震災広域複合災害の検証

阪神・淡路大震災や東日本大震災の検証につながる問題について学びを深める。

年3回程度の予定。

- 第1回：水俣の教訓から学ぶ(5月4日)
谷 洋一(水俣とアジアを結ぶ会)
- 第2回：災害ボランティアのその後(6月22日)
林大造(神戸大学学生ボランティア支援室)
岡本芳子(女性が担う地域防災塾)
頼政良太(被災地 NGO 協働センター)

(C) 上映会などの開催

以下の上映会を通して、「生きがいとは?」「自然とは?」を考え続ける。このことは文明災害を検証し、自然と一体となった営みの原点を学ぶことにつながる。

- 第1回：5月22日「友よ!大重潤一郎 魂の旅」
- 以下月1回程度の予定：「光りの島」(6月)、「風の島」(8月)、「縄文」(9月)、「ビッグマウンテンへの道」(10月)、「原郷ニライカナイー比嘉康雄の魂ー」(11月)、「先祖になる」(池谷薫監督)(12月)など
- 第2回「こんちくしょう 障害者自立生活運動の先駆者たち」監督：村上桂太郎

2. まけないぞう事業

(A) 東日本大震災支援の継続

現在、作り手さんは55人。仮設住宅から復興住宅への移転にともない、孤独や先の見えない不安から孤独死や自殺、体調の悪化を招いている。コミュニティの再構築を迫られるなか、被災者が少しでも前向きに生きられるように支援活動を行う。寄付金が減り、補助金もなくなり、NGO/NPO などの支援団体も激減し、被災者自身が趣味や特技などを生かしたサークルのようなものが、各地域で生まれ「孤独な生」を回避できるような被災者中心のコミュニティづくりをサポートする。避難生活が長期化する中で、精神的にも「まけないぞう」の役割は大きく、心のケアを中心に活動を展開する。また東京大学被災地支援ネットワークの呼びかけでできた盛岡を中心としたネットワーク「復興グッズ被災地主宰者連携会議」へ昨年同様に関わっていく。◇JT NPO 応援事業助成金申請中。◇花巻にある被災地支援アンテナショップ「結海」へ被災者支援として売り上げの20%を委託料として支払う。

(B) 広報・販促に関して

今年度は販売目標を1万5000個とする。宣言とアクションプランを発信しながら、新規開拓・リピータなどの掘り起こしを行い、一層の販促の強化に励む。岩手県不動寺の紹介で、真言宗の本山から3500カ所に配布される通信に掲載されることとなった。販売につながった寺院は丁寧フォローしていく。福岡教区でもまけないぞう運動に協力予定。こちらもつながりを大事にする。当事者の情報を丁寧に発信し、支援者と被災者をしっかりとつなげることを意識する。HP、SNS、チラシやリーフレット等関連資料の更新を行いながら、販売強化に努力する。

【販売イベント】

- ・4/26～29 高幡不動尊金剛寺(東京)別途300個境内にて取扱い販売
- ・5月真言宗高野山で1200年開祖に伴う大法会の期間中リングぞう取扱い販売
- ・5/3 わかちあい祭り(京都)
- ・7/24～28 第4回岩手発「手しごと 絆フェア コレカラ」(パークアベニュー・カワトク)

(C) その他

◇被災地ツアー

1ヶ月から2ヶ月ごとにスタッフと同行するかたちで、数名単位で現場視察やボランティア活動を行う。呼びかけについては、ML、HP、Facebook などを通じて行う。被災地への関心を持ってもらうと同時に販促にもつなげていく。

3. 災害救援事業

- 1) 国内災害に関する救援・復興・提言活動
- (A) 災害発生時の対応

これまで築いてきた震災がつなぐ全国ネットワークとの関係やその他のネットワークを活かしながら、災害発生時にはすばやく被災地へ入り、人間復興へつながることを意識しながら活動する。

(B) 復旧・復興支援事業

◇東日本大震災支援の継続

支援活動が脆弱になりつつある5年目の被災地で、まけないぞう事業を通して、引き続き神戸からのサポート体制を行っていく。また、福島のリ建活動(再生エネルギー活動)に取り組む人々への直接支援を模索する。東京大学被災地支援ネットワークとの連携は継続し、足湯ボランティアに関する書籍の発行に関わり、今年度発行される心の健康ガイドブックを活用していく。

◇広島土砂災害支援の継続

昨年8月に発生した広島土砂災害の支援活動を継続する。現地の団体を通して、支援活動及び市民会議への参画等を行う。また、広島密教青年会との共催で1周忌法要を開催する。

(C) 南海トラフ巨大地震に備えて

◇静岡県内外の災害ボランティアによる救援活動のための図上訓練(12月開催予定)

静岡県で行われる災害ボランティアのための図上訓練に参加し、日頃のからの顔の見える関係を築いていく。

◇女性が担う地域防災塾との協力

2014年度に引き続き、たつの市での活動等に積極的に関わっていく。また、たつの足湯隊の立ち上げのサポートを行う。

◇高知県黒潮町などとのつながりを継続

2013年度につながった高知県黒潮町と女性が担う地域防災塾(たつの市)のつながりができるようにサポートする。また、その他の地域とのネットワークを引き続き継続していく。

◇和歌山県、徳島県などとのネットワーク作り

昨年7月の台風被害の支援に入った徳島県海陽町や足湯隊での活動でつながっている那智勝浦町など、南海トラフ巨大地震で被災地となりうる可能性のある地域とのネットワーク作りを行う。

(D) その他

◇KOBЕ 足湯隊のサポート

KOBЕ 足湯隊の事務局として引き続き活動をサポートしていく。

◇たつの足湯隊サポート

5月17日足湯ボランティアの座学と実習

2) 海外災害に対する緊急援助活動とその後の復興へつなげる支援活動

(A) CODE 海外災害援助市民センターとの連携

例年通り、海外での災害発生時にはCODE 海外災害援助市民センターの事務局のサポートなどを行う。

4. 提言(アドボカシー)・ネットワーク事業

(A) 「阪神・淡路大震災から20年KOBЕ 市民とNGO フォーラム2015」の宣言文とアクションプランの具現化

寺子屋事業を柱とし、フォーラム関係者と企画を共に考えながら、阪神・淡路大震災及び東日本大震災の教訓や課題を掘り起こし、アクションプランの具現化に向けた学びの場作りとその実践にチャレンジする。

(B) 足湯ボランティア活動からの提言

昨年度から引き続いて、東京大学被災地支援ネットワークと連携し、震災がつなぐ全国ネットワークの一員として関わっている心の健康ガイドブックの完成を踏まえ、それを活用することによって、足湯ボランティアが心のケアの一つであり、災害時に非常に有効なボランティアであること、専門家との連携でより効果を発揮することなどを発信する。また、昨年から取り組んでいる足湯ボランティアの

書籍発刊を持って、提言の第1歩とする。

(C) まけないぞう事業からの提言

東京大学被災地支援ネットワークが岩手県で構築している「復興グッズ被災地支援グッズ主宰者連携会議」から被災地の課題を抽出し、提言できるようなネットワーク構築を目指す。また昨年掲げている「災害時ボランティア経済圏」という論の確立については、より具体的な実践事例を残したい。また、寺子屋のテーマとして取り上げたい。

<関係団体・グループとのネットワーク>

- ・しみん基金 KOBЕ/ 副理事長
- ・震災がつなぐ全国ネットワーク / 団体会員
- ・人と防災未来センター / 事業評価委員
- ・日朝兵庫友好の会 / 常任委員
- ・レスキューストックヤード / 評議員
- ・CODE 海外災害援助市民センター / 理事
- ・日本災害復興学会 / 理事
- ・内閣府防災ボランティア活動検討会 / メンバー
- ・東海地震に備えた災害ボランティアネットワーク委員会
- ・9条の会ひょうご
- ・神戸大学キャリアセンターボランティア支援部門アドバイザー委員会 / 委員

(その他)

神戸大学非常勤講師 / 福井大学非常勤講師 / 神戸松陰女子学院大学非常勤講師 / 神戸女子大学非常勤講師 / 日本防災士機構講師

5. 広報事業

(A) 通信「じやりみち」の発行

年4回の発行を予定
(6月 / 10月 / 1月17日 / 3月11日)

(B) ホームページの充実

HP はリニューアル中
新HP アドレス : <http://ngo-kyodo.org/>

(C) Facebook の利用

引き続き Facebook でも情報発信を行う

(D) メールニュースの配信

これまで通りメールニュースを配信する。
◇ハンストニュース
◇まけないぞうがつなぐ遠野物語
◇その他関連ニュース

6. その他

(A) 脱原発24時間リレーハンストの継続

2012年6月14日~引き続き原発がゼロになるまで発信する。

6月中 : 交流会を行う

(B) 伝統木造技術文化遺産準備会への参加

日本古来の家づくりの技術「伝統構法」をユネスコの無形文化遺産に登録する運動に取り組む。

(C) その他

基本方針に合致すると思われる活動は可能な限り取り組む。

第 56 号 2015. 7. 5



発行所：被災地 NGO 協働センター 〒 652-0801 神戸市兵庫区中道通 2-1-10
 TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702 HP:http://ngo-kyodo.org/



東日本大震災から丸 4 年を迎えました。阪神・淡路大震災では、5 年を前に仮設住宅は解消されました。しかし、いまだ東日本の被災地では仮設住宅があり、仮設を出るのはまだ最低でも 2 年はかかります。しかし、それはあくまでも予定の話なので、それ以上かかる場合もあるでしょう。被災者の心労は一層深さを増すばかりです。

広大な土地にトラックが土ぼこりをあげて、行き交う被災地では、大きな土の塊がいくつも存在し、近くを通ると土の壁があらこちらにできています。海のほうに目をやると、こちらにもコンクリートの壁が次々と出現し、海は全くと言っていいほどみえない場所がいくつも存在します。被災者の方は「こんなにお金かけたって、津波でやられるんだから。海がみえなきゃ、どうなっているかわからない。いくら行政に言ったってわからないんだ。だからみんな諦めてだまっちゃうんだ。」と次々に愚痴をこぼしています。ハード事業は着々と進みつつありますが、その街の姿を本当に被災者の方が望んでいるのかというと、どうやらそうでもなさそうです。

津波が来た時に、海の様子が見えるよう堤防に小窓がつけてありますが、遠くからみればまるで針穴のようで、「そこに見えた時には遅いよ！」と地元の人は言っています。これで人のいのちが本当に守れるのでしょうか？

作り手さんの様子はというと、丸 4 年となり仮設にいつまで住み続けなければならないかと不安と焦りからすこし精神的にも沈みがちな人たちもいます。中には、旦那さんが心筋梗塞や脳梗塞で倒れた人もいました。これまでに貯めた疲れが一気に出てきたのでしょうか？気力でこれまでやってきたのですが、身体が悲鳴をあげはじめています。作り手さんはそんなときに「まけないぞう」に手をのばします。「あの日から 4 年、復興も思うように進まず、家族が思いもよらない病気をし、気持ちががずみがちになり、何もしない日が続いた。自分がしっかりしないと悪い、ためにためたぞうさんを作ってみました。一つまたひとつ、その度に気持ちが楽になり、がんばれそうな気がしました。ほんとうに『まけないぞうさん』ありがとう」というメッセージをくれました。「まけないぞう」はいつも作り手さんに寄り添っています。



新たに造られた防潮堤



防潮堤の小窓



作り手さんと

災害復興住宅へ移った人たちの暮らしはどうでしょうか？この3月に復興住宅へ転居したぞうさんチームに大船渡まで会いに行きました。田園風景に突如現れた近代的なつくりのマンション。なんだかとても違和感があります。



復興住宅の様子

この日は4人のメンバーが久しぶりの再会です。4人のうち2人は自力再建、あとの2人が復興住宅へ入居されました。立地もとても近いのですが、3ヶ月ぶりの再会だそうです。やはり仮設と違って、行き来が格段と少なくなります。でも今日は久しぶりの再会に大笑いです。一人の方は高血圧でお漬物を控えるようにお医者様から言われているのですが、「やっぱりお漬物がないとね～」とパクパク。お友達が心配して、「食べすぎだよ」と注意すると、「大丈夫！先生に聞かれたら『食べてない！』というから」と。(大爆笑)「それでもみんなに久しぶりに会えて楽しいね。こうやってみんなで一緒に食べるとおいしいよ」と笑いが止まりません。集会所はあまり使われていないようで、何かきっかけがあるとみんな集まれるんだろうな…。



お茶つこの様子

仮設住宅では場所によってはほぼ空き家状態となり、半分がすでに復興住宅や自力再建などを果たし仮設を出てしまいました。久しぶりに訪問した作り手さんは、「私最近鬱かしらと思うの…」と涙をこぼしながら話し出しました。「全て失い、忘れることは絶対できないけれど、こんな辛いことがあったお陰でみなさんにこうして出会い、ぞうさんも作ることができたのよ。過去は変わらないから、前を向いて歩くしかない」と心の底から振り絞って言葉を発していました。取り残されていく孤独感、寂しさをこう

話すことで何とかぎりぎりのところで踏ん張っていまを生きているように感じてなりませんでした。

この作り手さんは津波で旦那さんと息子さんを亡くされました。旦那さんのお話はしてくれませんが、息子さんのお話ははまだ聞いたことはありません。彼女の悲しみの深さは想像をはるかに超えるのでしょうか。ただただ黙って話を聞く以外になすすべもありません。

彼女のつぶやきを紹介します。

「月日の流れの早いこと。あれから4年の歳月が過ぎ忘れ去られていくような感もしないではない昨今。震災にあった私もはまだ昨日のこのように思い出されます。『まけないぞう』のお陰様で心が癒され、一針一針心をこめて縫い続けております。」

まるで出口のないトンネルの中を彷徨っている被災者の人たちに「まけないぞう」が一筋の光を照らすかのごとく、そっとそばに寄り添っています。



支援者からのメッセージ

私もとても助けていただいています。本当にかわいい顔で、私を元気にしてくれるんです。是非、作り手さんの方々に御礼をお伝え下さい。私は自分の希望で国が変わっただけなのに、自分の生活コミュニティの変化にとっても苦労しています。被災地の方々の仮設住宅での生活、新しいコミュニティへの適応、コミュニティさえない環境、昔の住居への想い。。どんなに大変なことでしょうか。

